

## 〔本日の能のシテのご紹介〕



たけだ ゆきふさ  
武田志房  
〔翁／鶴亀〕

本日は、花影会にご来場賜わり、衷心よりお礼申し上げます。この会は四十年余り以前に、父太加志が、自分の勤めたい曲を舞う為に始め、父亡き後私が引継ぎ、今回が四十七回目となります。平成二十八年に、父の遺した舞台と土地、又、面装束等を寄付し父の名を戴いた財団法人を設立し、主催を財団に移しました。平成三十年より、江戸式楽に倣い「翁」と脇能を一人のシテが勤める演能形式を始め、今回が四回目となります。私も満七十九歳となり、二曲勤める体力的なことが少し気にかかり、脇能に「鶴亀」を選びました。この曲は、ご存じの通り中国の皇帝が新年を寿ぐ曲で、目出度い鶴と亀に舞を舞わせ、自らも舞うという、五十分ほどの曲です。「翁」の千歳を従弟尚浩の長男祥照に、鶴と亀を長男友志と孫の章志に勤めさせます。なお章志はこの役が初面（ハツオモテ）となります。初面とは、初めて面を掛け舞台に立つことです。本日は長時間の催しとなりますが、最後までゆっくり鑑賞賜われれば幸いに存じます。

シテ方観世流。重要無形文化財総合指定保持者。昭和十七年二月十日生。父太加志及び二十五世観世左近に師事。昭和二十三年、仕舞「合浦」の初舞台以降、軌道七十年にわたり観世流の重習（おもならい）の殆どを開曲し、平成二十九年十一月に能の最奥曲といえる「関寺小町」を抜き、文化庁芸術祭賞を受賞。平成二十四年旭日雙光章を受賞。平成二十八年十一月、長男友志と共に、武田太加志記念能楽振興財団を設立。一般社団法人観世会顧問、公益財団法人武田太加志記念能楽振興財団評議員。



さわむら しょうきち  
佐川勝貴  
〔弱法師〕

撮影：前島吉裕

太加志先生、志房先生が能の最奥曲である「関寺小町」を舞われたこの花影会で、初めてシテを勤めさせいただく荣誉に肅然たる思いがしております。弱法師は親に捨てられて信仰に救いを求める盲目の少年のお話ですが、家の子（※注）ではない私にとって、能楽界での修行の道は、まさに闇の中をあちらこちらにぶつかりながらの紆余曲折の道のりであり、勝手ながら大変共感を覚えております。今、先生を始め諸先輩方の導きのお蔭でこの舞台を勤められることを心より感謝し、精一杯舞台に臨む所存です。皆様には一時世俗の喧騒を忘れ、四天王寺の群集の一人となつて、盲目の少年をお見守りいただければ幸いに存じます。

※注：能楽界では、能楽師の家で生まれ育つて能楽師となつた者を家の子と言います。

シテ方観世流。重要無形文化財総合指定保持者。昭和四十六年十二月十八日生。平成二年に國學院大學に入学し國學院大學観世会に入部、武田志房の指導を受ける。平成八年武田志房に住み込みの内弟子として入門。十四年「小鍛冶」にて初シテ。十七年独立。十八年「石橋」、二十年「乱」、二十三年「道成寺」を披く。公益社団法人能楽協会及び一般社団法人観世会会員。平成三十年より公益財団法人武田太加志記念能楽振興財団常務理事として、東京都小中学校の能楽講座の実施等に尽力している。

### 解説

〈おきなつきつるかめ・だいこくれんが〉

## 能 翁附鶴亀・大黒連歌

芸能の本質を考えるための重要なキーワードに〈祝言性〉があります。古今東西の芸能のほとんどは、この世の平和を祈り、来たるべき未来の幸福を願うという性格を、その根底に含み込んでいます。歌を謡い、舞を舞うという非日常的な行為によって、私たちの生きるこの世の中を祝福しようとする営み。——それこそが、芸能という営為のもつ本旨であったのです。

それは、能楽の場合も同様です。現在でこそ、一日の公演で演じられる曲数は二、三曲程度となつてしまいましたが、昔はもっと多くの曲を上演するのが通例でした。その際、最も正式な形とされたのが、招福の儀式芸能である《翁》を一日の冒頭に置き、その直後に祝言を本旨とする能（「脇能」）、さらにそれに続いて祝言性の高い狂言（「脇狂言」）を続けて上演するという、祝言に始まるプログラム編成の形式でした。室町時代には既にその原型となるものが行われていたようですが、その後、江戸時代を経る中でさまざまな体系が形づくられ、現在に伝承される形へと整理されてゆきました。この、一日の冒頭に《翁》・脇能・脇狂言を一続きの祝言演目として演じる形式は「翁附」と呼ばれ、現在でも極めて格式ある上演形態とされています。本公演では、この翁附の形による祝言の芸をご覧頂きます。

翁附の際には、地謡・囃子方は《翁》終了後の脇能にも続けて出演し、囃子方はさらにその後の脇狂言にも続けて出演します。いわば、《翁》にはじまるフルセットの祝福儀礼全体に奉仕する役を担うこととなります。また、《翁》で大夫を勤めた演者は引き続き脇能のシテ（主役）も勤め、《翁》と脇能の双方において祝言を体現するのが本来の形とされており、本日はその形でご覧頂きます。能楽の根底に流れる〈祝言〉を、たっぷりと感じて頂ければ幸いです。

◆《翁》  
仮面劇である能楽にとって、面は芸に欠かすことのできない、極めて大切な存在です。世界の各地で仮面が神として祀られ、面に宿る靈力に対して人々が畏敬の念を抱いているのと同様、能楽の世界でも面は神聖な存在と見なされ、単なる小道具ではない特別の扱いを受けます。

これら能楽の面の中でも特に神聖視される「翁面」を用い、その靈力を借りることで天下泰平を祈るといふ儀式演目が《翁》です。《翁》は、演劇としてのストーリーをもつ通常の能とは異なり、翁面を祀るための神事であり、その成立は他の能よりも古く鎌倉時代に遡ります。白黒二つの翁面を御神体とし、それぞれを着用して祝祷の言葉を述べ、舞を舞つて世の平安を祝い願うという、《翁》の神事。本曲は、そうした謡や舞という芸の力によってこの世界に幸福を呼び込む、祈りと喜びの演目なのです。

◆脇能《鶴亀》  
皇帝が臣下たちとともに治まる御代の日々を謳歌し、嘉例に任せて鶴亀を舞い遊ばせるうち、自らも興に乗って舞楽を舞い出す——。《鶴亀》は、言ってしまうえば何のてらいも無い、ただそれだけの素朴な能です。

実はこの本作の筋立ては、中世において能楽と並ぶほど盛んであった芸能「延年」のうち、「大風流」というジャンルの演目群と同型の構成となっています。臣下たちを従えた帝王、そこへ現れた動物や精霊、そして最後に帝王が舞う祝言の舞楽。そんな延年大風流の類型を借り、能楽の作品でありながらも意図的に延年風の味付けで作られたのが、この《鶴亀》でした。

通常の脇能では、『高砂』に代表されるように、神が出現してこの世に祝福をもたらすという筋立てとなっており、本作とは全く趣を異にします。本作では、そうした劇的展開のドラマ性はほとんど排除され、ただただ平和に治まる王宮の描写が重ねられた上で、その中で皇帝の舞楽がクライマックスに置かれています。舞を舞うことそれ自体によって、祝言を体現しようとする本作。その目指すところは、『翁』にも通じる、芸のちからによる招福の精神だと言えるかもしれません。

#### ◆脇狂言《大黒連歌》

年越しの恒例行事として、大黒天への参詣を毎年欠かさない男たち。そんな一人の信心深さに応え、数々の宝を与えてくれた大黒天。——『大黒連歌』に描かれたのは、そんな庶民信仰の世界に生きる、素朴でおおらかな神の姿でした。

本作のシテ・三面大黒天は、比叡山延暦寺の「大黒堂」に祀られる神。平安時代最初期、伝教大師最澄が延暦寺を創建するに当たって、一山の守護神としてこの神を招き請じたと伝えられています。この三面大黒天は、大黒天・毘沙門天・弁才天の三つの顔と六本の腕をもって人々を救う神とされ、俗に「出世大黒天」とも呼ばれるように、現世の福德を願う庶民たちの篤い信仰を受けました。本作に描かれたのは、そんなささやかな幸せを祈る名もなき人々の願いと、それに応えてくれる身近な神の姿だったのです。

本作は、年越しの夜の物語として描かれています。今日までの一年間が平穏無事であったことに安堵しつつ、新しい春の訪れを心待ちにするひととき。それは、ささやかな日々の幸せを祈る人々の願いが、最も純化する時間なのかもしれません。折しも疫病の蔓延によって誰もが不安や苦しみを抱えている昨今、人々

能の中の俊徳丸。失われた時間は永久に戻らず、決して元通りのハッピーエンドなどあり得ない——そんな残酷な現実を、本作は我々に突きつけてきます。初演の頃には登場していたらしい、彼の手を引く妻の存在も、長い歴史の中で舞台から姿を消してゆきました。能が描く俊徳丸は、残酷な現実を背負ってひとり闇路をとぼとぼと歩む、孤独な青年だったのです。

そんな彼がすがったのは、宗教による救いでした。本作の舞台・四天王寺は、聖徳太子創建の霊場。中でもこの寺の西門は、極楽浄土の東門の真向かいに当たると信じられた聖地でした。折しも今日は春の彼岸、日輪が真西の水平線へと沈みゆく日。その夕陽の遙かかなたには、浄土の門が私たちに向かって開かれている。そう信じてやまぬ人々は、この日、こぞって天王寺へと集い、西の空へと思いを馳せます。清らかな日没の光の中に仏国土のすがたを思い描く、浄土経典に説かれた修行「日想観」を行う人々。そんな参詣人たちの列に、かの俊徳丸も連なるのでした。

決して開くことのない、俊徳丸の目。日没を見ることの叶わぬ盲目の彼は、かつての幸せだった日々に見た夕暮れの景色の記憶を頼りに、心眼によって日輪のすがたを見ようとします。彼の心に映し出された、夕陽の光に照らされた難波浦の致景の数々。それは、肉眼で見るリアルな風景よりも、何倍も美しく、輝かしいものでした。目が見えぬゆえにこそ見ることできた、この世の浄土ともいべき絶景の数々だったのです。

俊徳丸の心にはじめて映し出された、難波浦の致景の数々。それは、浄土を思慕する中世の人々が願ってやまなかった、奇蹟の体験でした。中世、四天王寺を訪れる参詣者たちの間には、「浄土参りの遊び」と呼ばれる風習がありました。それは、目隠しをしながら西門に向かって歩むことで、浄土往生をヴァーチャルに

の変わらぬ願いを描いた本作は、そんな今の私たちとも重なるテーマだと言えましょう。

〈よろぼし〉

### 能 弱法師

穏やかな陽気に包まれた、春の四天王寺。盲目の乞食・俊徳丸が施しの列に連なれば、芳しい梅の花びらが、彼の袖に散りかかる。——本作は、そんな春の難波の地で起こった、心の内なる奇蹟を描いた作品です。

本作の主人公・俊徳丸は、室町時代の語り物『説経節』の作品『しんとく丸』にも登場する、悲劇の青年です。継母に陥れられて家を追われ、果ては盲目の身となった俊徳丸。彼は、ひとり献身的に付き添ってくれる妻の手に引かれながら、流浪の日々を送ります。古代インドの王子・クナラ太子の伝説をもとに、日本を舞台に翻案されたこの物語は、室町時代には寺院の説法の間などで盛んに語り継がれ、聴衆の涙を誘ってきました。本作が取材したのは、そんな人々の記憶と伝承の中に生き続けた、悲劇の物語だったのです。

同じ俊徳丸の物語でも、説経節『しんとく丸』では、彼の目は清水観音の加護によって開くことが叶います。彼の父も、無実の息子を苦しめた天罰で同じく盲目となっていました。これも最後には息子の助けによって目が開き、父子はめでたく再会を果たすのです。俊徳丸を陥れた継母は断罪され、体も家庭もあらゆる困難が解消されて再び幸せな日々に戻るといふ、『しんとく丸』の結末。しかし能の『弱法師』は、それとは趣を大きく異にしています。盲目の身のまま父に連れられて実家へと戻ってゆく、

体験するというもの。あえて視界を遮り、心眼によって、天王寺の西門へ——そしてその向こうに開かれた浄土の東門へと突き進んでゆくことで、心の内に映し出される奇蹟の光景を、人々は擬似体験しようとしたのです。そんな中世の人々の夢見た救いの体験が、本作の俊徳丸には、真の奇蹟となってわが身に訪れたのでした。

とはいえ、それも所詮は一時の幻想に過ぎぬもの。他の参詣人と衝突し、盲人という現実を突きつけられた彼は、その心の内なる救いのひとときすらも失ってしまいます。失われた目は戻ることなく、奇蹟の瞬間も儚く消え、あとに残ったのはたった一人の非力なわが身——。しかしそんな俊徳丸の非力さこそが、見る者の共感を呼び起こし、本作を普遍的なドラマにしているのかもしれない。

【さらに知りたい人のために——主要参考文献】

《鶴亀》：西野春雄「作品研究 鶴亀」〔『観世』一九八〇年一月〕

《弱法師》：伊藤潤「中世四天王寺における「目隠し」の儀礼」〔『伝承文学研究』二〇〇四年三月〕、小林健二「作品研究《弱法師》」〔『観世』二〇〇五年一月〕、中村健史「『弱法師』と阿那律説話」〔『国語と国文学』二〇一四年一月〕

本稿はJSPS科研費JP20K21997に基づく成果の一部である。

中野顕正(なかのあきまさ)：日本女子大学学術研究員